

Title	時枝文法における文認定
Author(s)	仁田, 義雄
Citation	大阪外国語大学学報. 42 p.121-p.136
Issue Date	1978-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80716
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

時枝文法における文認定

仁 田 義 雄

Defition of the Sentence in TOKIEDA's Theory on Grammar.

Yoshio NITTA

This paper attempts to comment on TOKIEDA's definition of a sentence and to position it in the history of grammatical theory on sentences in Japan after Meidi period.

Motoki TOKIEDA is a linguist who is famous for propounding the theory of Linguistic Process (Gengo Katei Setu). He objected to the methods and assumptions of the comparative and historical linguistics of the 19th century in the West and to F. de SAUSSURE's theory. In the field of linguistic phenomena he attached importance to the speakers and hearers.

According to his thought, language is only the linguistic process of the speaker and hearer. He denied existence of *langue* in linguistic phenomena. Therefore, his method of grammatical analysis and description is mentalistic and has some aspects of pragmatics and of linguistic behavior.

He mentioned the following three conditions of a sentence.

- ① It should express a concrete thought. In other words, combination *Shi* and *Ji*
- ② It has a concentration.
- ③ It has a completeness.

The first condition can't explain differences between phrase, clause and sentence, The second is not a conclusive factor of the sentence. Clauses have some sorts of concentration. Therefore, the conclusive condition of the sentence in TOKIEDA's theory is the third. It is realized in the end of the sentence. This shows that his conclusive condition is grasped from a linear point of view. The condition of the sentence must be determined in the whole of the sentence.

〔I〕日本の言語学（国語学）の歴史の中における時枝誠記の位置

日本における近代的な言語学や日本語研究の講義・研究の出発点は、明治19年、東京帝国大学に博言学科が設置されたところに始まる。当時、近代的とは、取りも直さず西洋的であるということの意味していた。博言学科の初代講師が英人B. H. チェンバレンであったことは、その事を象徴的に物語っている。日本に西洋近代言語学を持ち帰り、紹介・移入し、日本の初期の言語学（国語学）

を育てた上田万年が、3年半のドイツ・フランスからの留学を終えて、東京帝国大学の博言学の講座担当教授になったのは、明治27年のことであった。上田は、ヨーロッパでH. Steintal, J. Schmidt, A. Leskien, K. Brugmannらに学んでいる。彼等は、いずれも著名な比較言語学者・歴史言語学者達である。当然、その上田が学ぶべき・研究すべき価値のあるものとして持ち帰ったのは、比較言語学であり、歴史言語学であった。したがって、明治・大正・昭和初期の言語学（国語学）が比較言語学・歴史言語学を、特に歴史言語学を主流にして発展してきたのも、これまた当然のことである。明治期に既に、日本語の系統に関する研究として、Aston: A Comparative Study of the Japanese and Korean Language, (明治12), Chamberlain: Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, (明治28) などがあり、日本人の手になるものとしては、金沢庄三郎『日韓両国語同系論』（明治43, 日英両文）—これは、H. Pedersen: Linguistic Science in 19th Century に紹介されている—などが出版されている。上田万年は、大学でH. Paulの“Prinzipien der Sprachgeschichte”を講じ、学生達に日本語の比較・歴史研究や音声研究の重要性を説き、自らも「P音考」を表わしている。

時枝誠記が東大に在学していた大正11～13年は、その上田が教授であり、そして、国語研究室の助手として橋本進吉が居た。橋本は、上田の持ち帰ったパウルの『言語史原理』に深い感銘を受け、厳密な方法で国語史、特に音韻史の研究に力を注いでいた。日本の歴史言語学は、この橋本進吉によってまず現実化することになる。この上田→橋本の比較・歴史的といった言語研究の歩みが、日本における正統的な（官学的な）言語研究の歩みである。その意味で、日本における近代言語学（国語学）の歩みも、他の諸科学と同様、まず西洋のそれを移入し、そして、日本のものへと消化・吸収するところにあった。日本語研究の近代西洋言語学化が、日本の言語学（国語学）のまぎれもない進歩である、と暗黙のうちに考えられ認められていたのである。

そういった言語学（国語学）の流れの中であって、時枝誠記の「言語過程説」は、極めて異質な存在である。橋本進吉が、H. パウルの『言語史原理』に代表される西洋の歴史言語学を学ぶことによって自らの言語研究を出発させ、したがって、それらを極めて肯定的共感的に受け取ったのに対して、時枝は、日本語研究の近代西洋言語学化を極めて否定的に受け取ることになる。そういった近代西洋言語学の否定の上に立って、新しい国語学—日本語にとっての、日本語からの言語学—といったものの確立を目ざして行なわれたのが、彼の言語の本質についての探求であり、彼の日本語研究である。時枝の「言語過程説」は、明治以来の国語学の近代西洋言語学化に対する一つの反動であった。時枝は、外国の学問の移入、そして、その消化・吸収に努めるといった風潮の強い我が国の学問世界の中であって、自らの独自の理論・学説をうち建てたという意味において、極めて異例の特記すべき学者であるということが出来る。時枝の「言語過程説」は、（その学説の妥当性は別として）日本人による日本人独自の言語学の確立であったと言える。

しかしながら、彼の「言語過程説」は、解釈や表現のため、或はそれに付随する言語研究といった言語研究の幼年期から、自らを比較言語学・歴史言語学として定立させることによって、既に曲り

なりにも言語研究を言語研究として自立させていた19C西洋言語学の真の克服にも止揚にもなりえなかった。時枝の「こと」としての言語観は、自らも語っているように、言語を表現や理解活動において捉えるものであることにおいて、（それだけではないにしても、事実、彼の言語観における現象学やデルタイの解釈学などからの影響が指摘されている）、言語研究が言語研究として自立する以前に解釈（古典）や表現（作歌）の中において行なわれた頃の伝統に由来するものである。時枝が、自らの言語研究を国語学史の研究からスタートさせたことは、この事を象徴的に示している。

〔Ⅱ〕「言語過程説」大概

しからば、そういった時枝の言語学・言語観が一体いかなるものであったのかを見ておくことが、当然必要になる。時枝誠記の言語観は、いわゆる「言語過程説」といわれるものである。この「言語過程説」の根底にある言語観について、時枝は次のように述べている。

「この問題（筆者注、言語と本質とは何かという問題）を考へて、私は言語は絵画、音楽、舞踊等と齊しく人間の表現活動の一つであるとした。」『国語学への道』P. 28

言語は、人間の活動そのものであるというのが時枝の言語観である。こういった基本的な考え方に立って、時枝は、言語は表現及び理解のプロセスそのものであるという「言語過程説」をうち建てることになる。時枝は、「言語過程説」を説明して、次のように述べている。

「(一)言語は人間、の表現行為そのものであり、また理解行為そのものである。この考へは、表現理解の行為とは別に、或はそれ以前に、表現理解において使用される資材としての言語（ソシュールのいわゆる「ラング」）が存在するという考へ方を否定するものである。あるものは、ただ、素材を、音声、或は文字を媒材として、可感覺的に外部に表現し、或は、音声、文字によって、ある思想を理解する作用だけであるとするのである。…(P. 7)

(二)言語が、表現理解の行為であるということは、言語は、常に表現主体或は理解主体、一般的に言つて、言語主体（言語を成立させる人間）を不可欠の条件として成立するものであることを意味する。…言語過程説の最も著しい特色は、一切の言語事実を、言語主体の意識、活動、技術に還元して説明しようとするところにある。(P. 7～8) …

(四)言語の行為主体が個人であるということは、言語学の対象は、特定個人の特定言語行為以外にはあり得ないことを意味する。ソシュールは、個々の言語行為とは別に、個人を超越して存在する資材的言語ラングを真正な言語学の対象と考えるのであるが、言語過程説は、明かにこの考えを否定する。(P. 9)『国語学原論続篇』（下点筆者、以下同様）

以上は、時枝が『国語学原論』で展開した自らの「言語過程説」を『国語学原論続篇』で要約的に述べている箇所其主要な部分である。以上の引用から分かるように、時枝にとって、言語とは、行為・活動そのもののなのである。行為であるとするならば、その成立は、行為を行なう人間の存在を無視しては考えられないということになる。したがって、時枝の言語学では、人間主体といった要素が極めて大きな位置を占めてくることになる。時枝が「言語過程説は、言語において、人間を

取り戻そうとするのである」(『続篇』P. 6) と述べているのも、この間の事情を物語るものである。時枝の言語学は、主体主義的言語学であり、極めて、mentalisticなものであると言うことができよう。主体主義的であるとは、既に表現されてある客観的な言語表現そのものよりも、その背後にあってそれを表現したり理解したりする人間の方をより重視する姿勢のことを、こう呼んでおく。

言語を、行為や活動の一形態として、「こと」的側面において捉えることにおいて、言語における人間の果す役割を強調したのが、時枝の言語観である。言語における人間の位置を強調することによって、時枝は、言語研究に新たな領域を拡大することになる。言語による伝達の問題、言語の機能の問題、言語と社会の問題、言語と文学の問題などがある。これらは、明治以来の国語学では、問題にならなかった、或は焦点の当たらなかった領域である。その意味で、時枝の「言語過程説」は、言語研究の領域を拡大したということにおいて評価されよう。

しかしながら、時枝のこういった主体主義的な言語観は、資材としての、ラングとしての言語とといったものを認めないことによって、その学説の妥当性において、極めて問題を有することになる。資材としての言語—もの₁的側面としての言語—を認めなければ、時枝の言う行為としての言語そのものが成立しないであろう。そこに同じ表現活動である絵画や踊りと言語との違いがある。言語は、表現活動であるとともに、伝達活動でもある。言語行為が伝達行為でもあるということにおいて、言語行為は、(現実的には、時枝が言うように誤解・曲解が起ったり、その危険が常に言語行為に存しようとも)相手に理解されることを予定して始めて成立しうるものである。相手に理解されるためには、言語が相手に理解されるだけの客観性・社会性を有していなければならない。その、言語の有している客観的・社会的なる側面を、一種の比喩として捉えたのが、資材としての言語・ラングに他ならない。時枝の言語観は、言語研究における人間復活を唱えている点などにおいて、極めて魅力的な部分を有する。魅力的な部分を有するものの、資材として言語といった側面を否定しまっているために、時枝自身、そういった魅力的な領域への研究の現実的な方途を獲得するに至っていない。言語の有している客観性・社会性は、時枝の言う、同時代・同社会の人間は同様な言語意識を有するとか、話手は聞手に制約されることによって社会性を有している、といったような説明方法で説明し切れるものではない。言語は、「もの」的側面の言語と「こと」的側面の言語の弁証法的統一体に他ならない。

時枝の言語過程説の発生成立の契機には、既に述べたように、近代西洋言語学(『原論』ではドソシュールを仮想敵手に回わして論じている部分がかなり見られるにも関わらず、時枝の研究の発展の経緯からして、この近代西洋言語学とは19世紀のそれである)への反動がある。比較歴史言語学が、その原子主義のゆえ、その複雑さゆえ、既に19世紀末期にはある種の危機と停滞期を迎えていたのは、これまた事実である(たとえば、H Sweet “A New English Grammar, I”の序P. IXなど参照)。しかし、そういった19世紀を真に克服・止揚したのが、その他ならぬド・ソシュールなのである。

〔Ⅲ〕 時枝の主体主義的文法研究

〔Ⅲ〕の(1) 概括

主体主義的な時枝の言語観は、当然、時枝の文法研究にも反映することになる。語、文、文章といった文法上の単位の認定にも、品詞分類のあり方にも、時枝の主体主義的な傾向は明確に表われている。言語や文の考察において、言語主体の関与といった要件を明確に持ち出したのは、時枝の主体主義的文法研究の一つの功績である。文の成立・構造（意味構造をも含めて）における言語主体の関与する部分の存在を明確に指摘したのも、時枝文法である。時枝文法は、文法研究に言語主体といったものを引きずり出した功績を有するものの、これは、また文法分析文法記述に表現論・語用論・言語運用論といったものを、無批判・無反省に持ち込む結果にもなった。形式（表現の形式、内容の形式）の追求記述であるべき文法分析文法記述に対して、言語主体を持ち出すことによって、解決を与えたような観に陥ってしまっているのは、主体主義的な文法研究の悪しき表われである。したがって、時枝の文法論は、文法記述として、分析・記述すべき表現されて有る言語表現を、表現論に言語運用論的に説明するといった、文法記述における方法論的な混濁を有するものになってしまっている。

時枝の文法研究は、主体主義的であるという言語観からの影響を受けて、これまた主体主義的であるという性格を有するものの、文法論の基本的な部分（たとえば語認定や詞辞への語分類や文認定文成立に関する説明など）を除いては、彼の主体主義が、彼が「言語の本質」の件で述べているほど明確に文法記述全体にわたって貫徹されているわけではない。『日本文法口語篇』や『日本文法文語篇』と他の人間の文法書を比べてみれば本質的な差のないことが分かる。やはり、動詞については、活用形や活用の種類が説かれ、助動詞についても、活用表が挙がり用言への接続の仕方が説かれている。

そもそも文法書が編めるということ自体、時枝の否定にも関わらず、言語が資材性といった側面—「もの」的言語の側面—を有していることの一つの表われなのである。

〔Ⅲ〕の(2) 「詞」と「辞」

そういった中で、時枝の「言語過程説」が、時枝の文法論において、もっとも明確にもっとも直線的に反映しているのが、時枝の「詞・辞」の論である。特に、「辞」の問題は、これから述べていく時枝の「陳述」文認定といった問題と密接に関係してくる事柄でもある。そこで、「辞」に目の中心を据えながら、時枝の「詞・辞」の論を簡単に見ていくことにする。時枝は、「詞」「辞」の性格の概要を次の如く述べている。

詞

- 「一 表現される事物、事柄の客体的概念的表現である。
- 二 主体に対立する客体化の表現
- 三 主観的な感情、情緒でも、これを客体的に、概念的に表現することによって詞になる。
- 四 常に辞と結合して具体的な思想表現となる。

五 辞によって統一される客体界の表現であるから、文に於ける詞は、常に客体界の秩序である「格」を持つ。』『日本文法口語篇』P.66 (以下『口語篇』と略す)

辞

「(-) 表現される事柄に対する話手の立場の表現である。

(二) 話手の立場の直接表現であるから、つねに話手に関することしか表現出来ない。

(三) 辞の表現には、必ず詞の表現が予想され、詞と辞の結合によって、始めて具体的な思想の表現となる。

(四) 辞は格を示すことはあっても、それ自身格を構成し、文の成分となることはない。』『口語篇』P.162

さらに、「詞」は「概念過程を含む形式」、「辞」は「過念過程を含まぬ形式」とされている。「詞」の一、二、三及び「辞」の(-)、(二)、(三)が、もっぱら「詞」「辞」の語性(意味或は表現性の側面からの)を説明したものである。「詞」と「辞」は、時枝にあっては、截然と分かれたる単語の二類なのである。単語であって、「詞」か「辞」のいずれかでないものはなく、また、「詞」か「辞」のいずれか一方以上のものであるものもない、ということになる。ここに、いわゆる時枝の「詞辞非連続観」なるものが生まれる。既に、この時枝の「非連続観」なるものに対しては、「連続説」の立場からの批判が多出している。

時枝の「詞・辞」の論には、連続・非連続といった技術的な或は部分的な手直し以上の問題がある。「詞」「辞」に時枝が与えている説明は、大きく二つの性格の異った類に分かれる。一つは、「詞」は客体的なもの、「辞」は主体的なものを表現する、といった「詞」「辞」なる語の有している意味論的な性格に関わるものである。もう一つは、「詞」は「辞」によって統一されるもの、或は詞は辞によって「格」の機能を付与されるもの、「辞」は「詞」を統一するもの、或は「辞」は「詞」に「格」の機能を付与するもの、といった「詞」「辞」の構文的機能に関するものである。第一番目の特徴と第二番目の特徴が、常にパラレルである、という保証はどこにもない。どこにもないどころか、パラレルでないと考える方が、むしろ自然である。時枝の最大にしてかつ根本的な誤謬は、第一の側面における特徴と第二の側面における特徴を完全にパラレルなものとして扱い、第二の側面におけるそれぞれの性格が、第一のものから自動的に出てくるかのように取り扱っていることである。純粹ないわゆる機能語は、対象的な語義的意義(関係的な意義でない)を含まないにしても、逆に、いわゆる内容語が構文的機能(或は関係の意義)を決して含まない存在としてしか存在しないというようなことは、保証の限りではないし、通常有りえたいことである。さらに、機能語の意義が必ず時枝の言う「主体的」なものである、という保証も、これまたどこにもない(格助詞などの意義を考えてみれば、おのずから明らかになろう)。そういった意味で、時枝の品詞分類としての「詞・辞」の論は、二重にも三重にも誤謬を犯していることになる。

「辞」の特性や働きについての時枝の論述も、それが「主体的」なものの表現といった意義的な語性に焦点が当てられて論じられる場合と、「総括統一作用」といった構文的機能の側面に焦点が当

てられて論じられる場合との間を、記述の展開の都合に応じて揺れているのが、その現情である。そういった、「辞」或は、「辞」的機能といったものについての時枝の論述の仕方が、これから述べる時枝の「陳述」といったコトバの内包のあり方にも影響を与えてくることになる。

〔Ⅳ〕 陳述論史における時枝誠記の位置

「陳述」というコトバを、文法現象の記述用語として文法理論に導入したのは、周知のごとく、山田孝雄である。したがって、「陳述論史」は山田に始まる。そういった「陳述論史」の流れにおいて「陳述」といったコトバの内包する概念は、時枝を境にして大きく変化することになる。「陳述論史」には大きな山が三つある。「陳述」というコトバの創始者の山田孝雄と、それを自らの「言語過程説」「詞・辞」の論によって捉え直した、というよりは、山田と同じ「陳述」なるコトバを使いながらも山田とは基本的に関係なく自らの「言語過程説」「詞・辞」の論の中で陳述というコトバを使ったに過ぎない時枝誠記と、時枝のそういった表現論的な文法論に大なる共感を感じながらもそれを構文論的に批判することによって、陳述なるコトバを、文成立の構文的職能として捉え直した渡辺実との三つ山である。

山田の陳述が、山田の言う「述体の句」の成立を説明するために、用言の「述格」の言語上の作用・機能を表わすコトバとして、文法記述に導入されたのに対して、時枝の「陳述」はそういった、「句」の成立の説明概念・説明用語といったものより遥かに広い概念になっている。時枝の「陳述」は、時枝の言う「主体的総括作用」に密接に関係するものであり、したがって、時枝の言う「陳述」は、時枝の言う「詞・辞」の「辞」と密接な関係を有する存在である、ということになる。

「陳述を表わすものは、その語源が如何にあらうとも辞と認めようとするのが私の立場である。」
『国語学原論』P.273 (以下『原論』と略記する)

「私が、陳述作用（或は統覚作用）の表現と、辞とを、その本質から見て同類のものと考へ…」
『原論』P.334

以上の引用から分かるように、時枝の「陳述」は、「辞」及びその潜在的言語表現態である「零記号の辞」によって表現されることになり、「陳述」は品詞論的には辞である、ということになる。しかしながら、「陳述」が「辞」であるということは、必ずしも「辞」が全て「陳述」の表現であるということの意味してはいない。意味してはいないものの、時枝の言う「陳述」が、時枝の言う「主体的総括作用」（したがうて辞）全体にほぼ対応する勢いを有する傾向にあるのも、これまた事実である。

「例へば、「春の雨」に於ける「春」のは「雨」を装定するのであるが、それは、「の」が春を包む関係に立っている為であって、詞（春）辞（の）の結合によって始めて装定の陳述が成立するのである。」『原論』P.244～245

の如く、事実、格助詞「の」にも「陳述」を認めていると思われるような記載も存している。装定形成といった構文的機能を「陳述」というコトバで表現することによって、語として、構文的機能

を常に自らの中に含む連体詞や副詞（事実、これらの語は、常に構文的機能を含有することによって、後に、時枝文法の継承者達にとって、問題になる語である）の中に陳述を読み取るということにもつながっていく。時枝は、「ある日のことです。」（『口語篇』 P.136）や「会議はすでに終わった。」（『同』 P.138）の連体詞『ある』や副詞「すでに」について、

「…その用法が限定された特殊な語であるから連体詞と呼ぶことにする。…厳密な意味に於ける連体詞に於いては、右のやうな（筆者注、「昔のこと」の「の」を指す）修飾的陳述を表わす語は、語そのもののの中に融合してしまつてゐると見るべきである。」『口語篇』 P.137～138 「…連用修飾語として以外に用ゐられない語である。即ちこの語は連用修飾語としての性質をその中に持つてゐると見る事が出来る。このやうにして、一語にして概念と同時に修飾的陳述を含む語を特に副詞と名づけるのである。」『同』 P.139

と述べている。このあたりになると、「陳述」は、さらにその内包を拡大させて、ほぼ構文的機能そのものと等価になってしまう。したがって、複数の構文的機能に対応する用言は、その複数の構文的機能に対応する活用形を有し、その活用形は、「陳述」に応ずる（陳述そのものを表わすのではなく）語形変化である、ということになる。

「…動詞の活用の場合、常に特定の陳述、例えば、推量とか打消、或は連用修飾的陳述、連体修飾的陳述に応ずるところの語形変化で…」『口語篇』 P.101

以上の引用からも、時枝においては、「陳述」なるコトバが、ほぼ構文的機能に対応する勢いにあることが分かる。「陳述」なるコトバは、かくの如く拡大された使われ方をしているものの、またその一方では、終助詞にさえ陳述を認めないといった限定された使われ方をしている箇所もないではない。

「…助動詞は常に陳述即ち判断を表わすものであり、従つて、その点、文の中に用ゐられている用言と同様に、その運用上、多くの活用を具備するのであるが、助詞は、陳述の表現ではないから活用を持たない。」『口語篇』 P.216

助詞に陳述がないのであるから、当然、助動の一類である終助詞にも陳述は存しないことになる。（ただし、終助詞における「陳述」の存否については、『原論』と『口語篇』ですらその記載に矛盾がある。『原論』（P.336～337、P.353）では、終助詞に陳述の存在を認めている。）終助詞（たとえば、「外は雨か。」の「か」）にさえ「陳述」を認めないということから、「陳述」なるコトバを、命題に対する判断を中心とした（しかも品詞論的には助動詞を中心にした）命題態度に限定しようとする時枝の姿勢の表われを読み取ることは、さほど困難なことではない。

まさに、時枝の「陳述」とは、そういった広狭両方の間を揺れ動いているものであり、その意味では、極めてルーズな無規定的な使われ方をされているコトバであると言えよう。ただ、その広狭両用の使用例においても一貫しているのが、「陳述」は、言語主体の主体的な総括作用・包む機能であるという点である。そして、この、時枝の「陳述」とは、言語主体の側に属するものであるという点（しかもそのうち文成立に密接に関係してくる部分）が、彼の「言語過程説」といったものと

の関連もあって、後の「陳述論」の展開に大きな影響を及ぼすことになる。

したがって、「陳述」なるコトバは、時枝の文献においては、いろいろな修飾辞を冠して使われることになる。判斷的陳述、推量的陳述、想像的陳述、否定的陳述といった命題態度的なものから、敬語的陳述といった命題態度と言うよりは「聞き手めあて」的なものまでが、同じように、「陳述」というコトバで同一に纏め上げられるのは、陳述の所在を、品詞論的な観点から助動詞であるとしたことによる混乱であり、さらに、装定的陳述や(連体)(連用) 修飾的陳述といった用語の存在などは、「陳述」を「辞」さらに進んでは、構文的機能とほぼ等価なものとして把握するところからくるものであると言えよう。

我々には、極めて振幅の大きい、混淆したとも思われる内包を、時枝の「陳述」なるコトバは有しているのであるが、これは、時枝が「辞」の本質及びその機能といったものに与えている説明・つまり「辞」の概念規定のあり方からよって来るところのものである。

時枝の「陳述」なるコトバは、以上見てきたところからも明らかなように、本来的には「句成立」や「文成立」といったものと直接的に結び付く（或はそれへの説明を目的とした）概念ではない。

「陳述」の一部に文成立に密接に関係してくるところのもの（もっとも、これが「陳述」の最重要な箇所であるに違いないが）が存しているに過ぎない。

ただ、時枝の「陳述」が以上のようなものであるということと、時枝の「陳述」が後の「陳述論史」の流れにいかなる影響を及ぼしたかということは、別ものである。時枝以後、「陳述論」は、文成立における言語主体の果す役割、及びその言語表現における表われといったものへの注目・重視といった歩みを取るようになる。

〔V〕 時枝の山田文法理解—特に「陳述」「統覚」を中心にして—

〔V〕の(1) 山田の「陳述」と「統覚」について

以上が、時枝の「陳述」なる概念のあらましである。時枝が、時枝以後の世代に与えた影響の決して少なくなかったことを考えるなら、時枝以後の「陳述論史」の流れを正しく理解し位置づけるうえにおいても、また、時枝自身の文成立・文認定を正しく理解するうえにおいても、時枝の山田文法理解・批判といったものを正しく再検討しておくことが、これまた必要になってこよう。

〔注〕既に述べたように、山田の「陳述」と「統覚」とは、山田のまぎらわしい記述にも関わらず、全同の概念ではない。「陳述」は、「統覚」の一部（述体の句）を言語上の機能として捉えた概念である。したがって、「統覚」と「陳述」は、レベルと範囲が違う。それに対して、時枝が山田の「陳述」と「統覚」について次のように述べるのは問題がある。

「山田氏は、思想の統覚作用を思想の内容である表象或は概念の外に置き、これを統合する作用と見られたのであって、氏の陳述の作用とは又この統覚作用と同一の事柄と考へなくてはならない。」

『原論』 P.334

「統覚作用の表現を専ら述格に帰し、述格たり得るものは用言より外なしと考へられた山田氏は

…』『同』 P.338

「統覚作用の所在を用言に帰した博士（筆者注、山田のこと）の学説…」『同』 P.338

「文には統覚作用の表現即ち用言が必要であるとする論旨…」『同』 P.339

以上の四つの引用から分かるように、時枝は、山田の「陳述」と「統覚」を同一視している。これは、時枝の読み誤りである。山田の統覚と陳述とはレベル（「統覚」は精神作用、「陳述」は言語上の機能）と範囲（「統覚」は全ての文に存在する、「陳述」は二元性を有する述体の句のみ）とが違ふ。時枝の読み誤りは、この点を無視したものである。山田の「統覚作用」は、用言や述格にその存在を限定されるものではない、喚体の句においては、呼格にその存在と働きを指定できるようなものである。時枝は、どうも、人の著書を正確に読むというよりは、自分流に読むという傾向を持った人間らしい。したがって、時枝の「山田」解釈には、結果として、時枝自身が色濃く反映してしまっているということになっている。時枝が山田の「陳述」と「統覚」とを同一視するといった誤った理解をしたということが、これまた逆の意味で、時枝の「陳述観」といったものを示すことにもなっている。「陳述」というコトバは、山田にも時枝にも使われているが、その内包が異っている。「陳述」というコトバ・概念は、時枝の「陳述」(特に文成立の局面におけるそれ)からの影響によって、時枝を境にして大きく変化していくことになる。(基本的に、山田の「陳述」は、客体的な文の素材部を包んでそれに統一性を与える主体的なもの、といったふうに、客体に対する主体といった対立関係において、問題になるようなものではない。それに対して、時枝以後の「陳述」は、往々にして文の統一・完結性を与える主体的な表現というあり方で問題になる傾向を有している。)

〔V〕の(2) 山田の「喚体の句」について

時枝が、山田の「統覚」と「陳述」を同一視するという誤解を犯したことによって、時枝の山田理解・解釈は、いたるところで誤ったものになってしまう。山田の「喚体の句」についての時枝の批判も、したがって、極めて的はずれた、誤ったものとなってしまっている。

「こゝに句といはれてゐるものは、一般に文のことであつて、博士は、この文（筆者注、引用の前の部分で述べられている希望の喚体の句のこと）の成立条件は、希望の対象である体言と希望の助詞とによって充分であると考えられてゐるのであるが、若し右の条件を以て文の成立に充分であるとするならば、博士が先に述べられた文には統覚作用の表現即ち述語たる用言が必要であるとする論旨と矛盾を来すこととなるのである。統覚作用の所在を用言に帰する考方を以て貫くならば、希望喚体句は文より除外せらるべきであり、希望喚体句を文として認めるためには、希望の終助詞に統覚作用の所在を認めなければならないのである。」「原論』 P.338～339

ここに引用した部分は、時枝の山田理解・批判のいいかげんさが極めて明瞭に表われている部分である。まず、山田の「句」は「文」と同値の概念ではない。「句」を「文」に置き換えて読むことは、山田のSyntaxが、まさに「句論」であることから考えても誤りである。時枝が、山田の「統覚」「陳述」を読み誤ったその結果が、時枝の、山田の喚体句に対する理解に集約的に表われている。「喚体の句」は、まさに、「統覚」と「陳述」の範囲の違いを、句の類別として具現化している存在

なのである。したがって、「統覚」と「陳述」を読み誤った時枝が、「喚体の句」について読み誤りを犯すのも、これまた当然のことである。山田のキー概念・キーワードたる「統覚」や「陳述」について致命的な誤読を有する時枝の「山田句論」理解・批判は、したがって、そのことによって、致命的な欠陥を有することになる。

上引の時枝の、山田の「喚体句」に対する批判を再検討することによって、時枝の山田理解度といったものをさらに具体的に示そう。山田の「句」は、「統覚作用」の存在・働きによって認定されている。したがって、「句」の成立には「統覚作用」の存在が必要になる。ここまでは、時枝の山田理解に誤りはない。山田の「統覚」と「陳述」とを同一視することによって、時枝は、「統覚」を用言及び用言の述格に限定させるという誤りを犯している。山田によれば、「句」は「統覚作用」が機能することによって成立する。これは、喚体の句にあっても述体の句にあっても同じである。ただ、喚体の句と述体の句では、「統覚作用」の言語的な表われ方が違うのである。述体の句は、〔(主格一賓格)一述格〕という構成を取ることににより、「統覚作用」が用言の述格に託されることになる。それに対して、喚体の句は、句の中心構成要素である呼格の体言に、「統覚作用」が託されることになる。したがって、山田にあっては、句における「統覚作用」の存在が、必ずしも、句における述格の存在を意味しない。述格不在の「統覚作用」といったものが、考えられるのである。したがって、「統覚」＝「陳述」＝述格(用言)といった誤解のもとに立つ時枝の、「喚体句」批判が、極めて的はずれなものであることが分かる。山田の喚体句は、決して、時枝の言うように、山田の「句」成立・文成立の条件に合わない存在ではない。山田の「句」成立・文成立の条件の範囲内にある存在である。したがって、時枝が山田の喚体句について次のように述べるも、明らかに誤りである。

「山田博士は、文の統一を統覚作用に求めながら、私の考とは異って、統覚作用は専ら用言にのみ寓せられてあるといふ氏の見解から、右の喚体の文(山田氏は喚体の句といふ)の説明に於いて、統一点は寧ろ体言の上に冠せられたる「妙なる」の如き連体格にあると考へられたのである。」『原論』P.333

山田は、決して、時枝の言うように、用言の連体格を、喚体の句における統覚作用の託された、したがって、句を統一するところの中心的成分と考えていたのではない。既に述べたように、山田にあっては、喚体の句の中心成分は、あくまで呼格体言なのである。時枝が、山田の喚体句に対して下している解釈・批判が、このように、ことごとく誤ったものになってしまっているのは、時枝が、山田句論のキー概念・キーワードたる統覚・陳述というコトバを捉え損ったことに、そもそも基因している。このように、時枝の「山田句論」理解・批判といったものは、極めて不十分なものであることが分かった。時枝以後の学者の山田の「句」についての理解批判の中に、時枝に拠った、(或は時枝の影響を受けた)ものの少なくないことを思えば、時枝の「山田」理解の及ぼした影響(マイナスの影響)を看過することはできない。その意味でも、時枝の「山田」批判は、もっと再検討されるべきであった。

〔V〕の(3) 時枝の「文」と山田の「句」

次に引用する時枝の「山田」批判・批評は、山田が「句」というあり方で、時枝が「文」というあり方で、それぞれに追求しようとした、それぞれのSyntaxの性格・焦点の置き方の違いを示してくれらるとともに、ひいてはその事によって、時枝文論の特徴をよく示しているものである。

「イ. 山に登る。

ロ. 山に登るは愉快なり。

(イ)(ロ)は、共に「山に登る」といふ句を以て構成された文であるといふことはいへるのであるが、何故に(イ)に於いては、「山に登る」といふ句が運用上文といはれるにも拘はらず、(ロ)に於いては、それが句であって文とはいはれないかの根拠を見出すことが困難である。(ロ)の「山に登る」の如きを、山田氏は一個の文の一部即ち独立せざるものとして、(イ)の場合とは別に扱はれたのである。…(ロ)の場合は独立せず、(イ)の場合は独立してこれを文といふことがいはれる為には、統覚作用以外の別の考を加へなければいふことの出来ないことである。我々の要求することは、元素的に見て同一であることを知ることではなくして、最も肝要な問題は、(イ)(ロ)の「山に登る」が夫々本質的に如何なる点が相違してゐるかといふことでなければならない。山田氏の研究は、文に於ける単位を決定することは出来たであらう。しかしながら、氏は、句の運用によって成立した一個体である文と、文中に存す句との根本的な相違点については、遂に何ものをも規定することが出来なかったのである。」

『原論』 P.341

ここに、山田が句論として志向したものと、時枝が文論として志向したものとの違いが、明瞭に表われている。山田の「句」といった概念・存在は、時枝の論評にもあるように、「完結」「未完結」といった概念とは関係のない存在である。山田は、諸々の文に見出されるところの単位的存在である「句」の認定・定義、その運用に自らのSyntaxの焦点を置いたのである。単文においては、「句」の認定が文の認定に重なるものの、山田は、時枝も指摘しているように、文成立そのものについては完全な説明を施していない。したがって、山田のSyntaxはまさに「句論」なのである。ただ、山田の「句」成立論を「文」成立論としてのみ見立てて批難するのは、当を得ていない。山田文法が「句」成立論以外に「文」成立論を持つべきであったとしても、それに対して、時枝のSyntaxは、まさに「文」の論なのである。文を一つの質的統一体として把握することによって、文を文ならざるものから区別すべき原理といったものが、文論の重要なテーマとして問題になるのが、時枝の文論である。したがって、時枝の文論にとっては、「完結」といった概念が極めて重要な問題になってくる。「文」の論といった性格を有する時枝文論は、したがって、山田が開拓したような、諸々の文に見出されるところの単位的存在の考察に対しては不十分であった。

〔Ⅵ〕 時枝の文認定

〔Ⅵ〕の(1) 文という単位

以下、文認定・文成立に関わる論を中心に時枝の文論を具体的に見ていくことにする。

文は、当然のことながら、時枝にあっても一つの文法的単位である。文は、一質的統一体として、語とは異った単位である。

『文』も亦言語に於ける単位と考へなければならぬ。文は決して単語の集合でもなく、単語の連結でもなく、文が文となる為には、それ自身を一体とし、統一体とする条件が必要である。』『原論』 P.218

と時枝が述べているのが、それである。文が、語や文章と違った単位体であるとすれば、当然、文は、語や文章とは違った統一原理を有しているはずである、ということになる。文を文たらしめている統一原理を究明することが、時枝にとっては、文の文法学的研究のなすべき重要な課題である、ということになる。そして、そういった文を文たらしめている統一原理を明らかにすることが、質的統一体としての「文」の本質を明らかにすることであるとして、文の有している語とは異った性質として、次のような三種のものを挙げている。

「(1) 具体的な思想の表現であること。

(2) 統一性があること。

(3) 完結性があること。』『口語篇』 231

したがって、これらの性質が、語とは違った、文を文たらしめている統一原理を文に与えているものであり、これが、時枝の文認定・文定義である。以上から分かるように、時枝の文論は、文そのもののトータルな性質の究明に焦点の当てられたものである。そして、これが、また時枝文論の一つの特徴である。以下、時枝が文の本質規定として挙げている三条件について見ていく。

〔VI〕の(2) 具体的な思想の表現

「具体的な思想」を有していることが、時枝にとっては、文であることの一つの条件である。語も文も思想の表現（『口語篇』 P.231）であるとする時枝にとっては、「具体的」という条件が、文を語から分ける一つの条件になる。その「具体的な思想」ということについて、時枝は、次のように述べている。

「…具体的な思想とは、客体界と主体界との結合において成立するものである。従って、具体的な思想の表現とは、客体的なものと、主体的なものととの結合した表現において云ふことが出来るのである。文とは、このやうな具体的な思想を表現するものである。…」

犬だ。

といふ表現になると、客体界の表現「犬」と同時に、それに対する判断が、「だ」といふ語によって表現されて、ここに主体、客体の合一した具体的な表現が成立する。これが即ち文と云はれるものである。』『口語篇』 P.232

時枝にとって、語は客体的な思想か、主体的な思想か、どちらか一方の表現でしかありえないことによって、〔客体＋主体〕といった意味内容を持つ表現は、語ではありえない、語以上のものであるということになる。この〔客体＋主体〕が、時枝の言う「句」である。「文」を「文」たらしめている性質の一つである「具体的な思想」という条件は、時枝の「詞」「辞」といった品詞分類を前提にしたものである。〔客体＋主体〕、そして、これは、時枝の品詞論的な観点からは〔詞＋辞〕の結合であるが、これが、語でなく語以上の、そして最終的には、「文」たりうる存在でありえるのは、語

が、「客体」「主体」といった意味内容によって、「詞」「辞」に截然と分かれることを前提にしてのことである。この事に疑義が存するとすれば、時枝の言う「具体的な思想」は、文を語と区別する条件・性質にはなりえないことになる。

〔VI〕の(3) 句

具体的な思想を問題にすることにより、「句」といったものが定立されることになる。時枝の「句」は、「句」という同じコトバを使いながら、山田のそれとは、極めて異質なものである。詞・辞の結合が時枝の「句」である。「句」は、語が潜在的であったのに対して、文法機能を有する具体的な単位である。

「句」については、少なくとも、次のような問題点が存する。〔詞＋辞〕が「句」であるとして、果して、「句」が、常に〔詞＋辞〕という構造を有しているのであろうか。詞が、単独で「句」でありえることはないのであろうか。これは、時枝の設定している「零記号の辞」といったものの妥当性に関わってくる問題である。時枝は、「花咲く。」といった文を、

花 咲く

の如く分析し、常に「句」を〔詞＋辞〕の結合として理解している。これは、語が文中において果している文法機能の託され方といったものを無視したものである。語の文法機能は、助詞といった付属辞で表わされることもあれば、その語自体の語形式（屈折、或は可能とあらば、アクセントのような超分節形態素）によって表わされることも、語序によって表わされることもある。一般言語学的に見て（特に類型学、Typology）、純粹に一つの方法だけによって、文法機能を具現化している言語の存在といったものは考えにくい。したがって、日本語がいくつかの方法を併用したとしても、なんの不思議もないわけである。事実、用言は、屈折という語形変化によって、文法機能を表わしている。さらに、副詞や連体詞といった語は、語の本来的な特性の中に自らの文法機能を含んだ存在である。したがって、時枝、が「句」を常に〔詞＋辞〕の形において認定することには、かなりの無理がある。この点に関しては、既にいくつもの批判がある。

さらに、時枝は文法機能を具現している語を、客体的でない、話手の立場の直接表現の語であると断定している。この事も、既に述べたように問題がある。そもそも、言語においては、客体化されない表現などというものはありえない。言語として表現されてあるということが、客体化されてあるということなのである。時枝の「辞」についてのこういった物言いも、語用論的・表現論的なものの、文法論へのけじめのない混入である。ものを見る行為、ものを認識する行為が、時枝の言うように、「客体」とそれへの「志向作用」であるとしても、その結果して表現された客体的な対象（言語表現）の説明・記述を、それを作り出す行為についての説明・記述で換えてはならない。時枝の文法論がこういった問題点を有するもの、これまた時枝の言語観によるものである。

さらに、時枝の「句」といった概念は、Phrase的な存存をも、Clause的存在をも、そして最終的には Sentence 的存在をも指しうるものである（もっとも、辞の種類によって、これらの違いを指定できるにしても）。これらの文法的に異った存在を、その異り方を明確に指摘することなしに、表

わすことのできる概念・コトバは、やはり文法記述の用語としては問題を有している。主語格、客語格、補語格、修飾格が、一様に述語格から分出したものであると考えられているのは、「句」のこういった伸縮自在性にもよっていると思われる。

〔Ⅵ〕の(4) 統一性

さらに、時枝は、文の性質を規定する条件として、したがって、文以下の存在から文を区別するものの一つとして統一性といったものを挙げて、次のように述べている。

「…我々がそこに文を意識し得るのは、思想の統一があるからである。思想が如何にして統一的に表現されるかといふことは、国語に於いては、専ら辞の総括機能に基づくものである。」『原論』P. 351

「文に統一性があるといふことは、それが纏まった思想の表現であることを意味する。如何に語が連続してゐても、纏まりのないものは文と云ふことが出来ない。…文の纏まりは何によって成立するかといふならば、それは話手の判断、願望、欲求、命令、禁止等の主体的なものの表現によるのである。」『口語篇』P. 234

以上から分かるように、時枝は、①それが文であるためには統一性が必要である、②その統一性は辞の総括機能によってなされる、③総括機能を担う辞は話手の主体的なものの表現である、と考えていた。文の纏まりが話手の主体的な表現によって与えられるとする時枝の考えは、後の「陳述論史」に多大の影響を及ぼすことになる。辞は、時枝にあっては、「言語主体の総括機能の表現」であり「主体の包むことの表現」である（『原論』P. 239）。辞を「主体的な機能」（口語篇P. 235）（或はその表現）としてのみ捉える時枝の記述は、舌足らずである。舌足らずというよりは、これまた、時枝の言語観から来るところの文法論への語用論・表現論的解釈・説明の混入である。辞という既に表現されてある言語表現に、言語主体の側に属する意義や総括機能といったものが託されうるのである。辞といえども資材性を有している。資材性を有しているからこそ、辞を使って表現を行なうことができる。

表現に統一性を与えるものとして、時枝は、(1)用言に伴う零記号の陳述、(2)助動詞、(3)助動を挙げている。(1)については、既に批判した。助詞についても問題がある。「雨か。」の「か」は統一性を与える助詞であるにしても、「雨が、」の「が」は、それと同等の意味で、統一性を与える助詞と言うことはできない。その統一性は、文の統一性の箇所の問題になるようなそれではない。時枝の説明からすれば、当然一つであるべき辞に、このような差異が存するのである。時枝の説明では、これら両者の区別が明確ではない。これは、時枝の「句」という概念の有する問題性（ここでは、「句」がPhrase的存在をも、Clause的存在をも指しうる概念であるという問題性）に至るわけであり、結局、時枝が、Clause的存在を明確に定立しなかったことに基因する。

いずれにしても、文の統一性が、線条的に文の末端において局在的に捉えられていることには、問題がある。文の統一性といったものは、質として文全体に存するものである。動詞と格を表わす成分との照応といったものも、これまた、文の統一性の形成に関わるものの一つである。文の統一性

が、文の末端において局在的に捉えられているといったようなことは、文の構造が線条性を重視した姿勢で捉えられていることによる誤謬である。文の構造は、線条的であるとともに、より本質的には立体的である。順序的な時枝の入子型が、文の構造を部分的にしか正当に表示できないのも、この事によっている。

〔Ⅵ〕の(5) 完結性

〔詞＋辞〕や統一性といった文成立の条件は、さらに、完結性といった条件で補われなければならない。文そのもの（山田の言うClause的な句ではなく）の成立を問題にする時枝文論にとっては、まさに「完結性」そのものが、最終的には文の成立のきめてになる。時枝以後の文成立論が、文の成立を最終的には完結性において見る傾向を有するといった方向へ進む契機を、時枝文論が既に有している。

「…文の認識において他の重要な条件は、詞に辞が結合することであると同時に、その辞は完結する処の辞でなければならないといふことである。…文と考へられるのは、それが主語・述語を有するが為でもなく、又陳述作用を伴ふ為のみでもなく、実に完結せる陳述作用がある為に、文と認識され、統一した思想の表現と考へ得られるのである。」『原論』P.355～356

「この表現（筆者注、引用文の前に完結性がないことによって文でないとして挙げられている、「裏の小川はさらさら流れ」といった表現）が文であると云はれるためには、表現の最後が、終止形によって切れる形をとることが必要な条件となる。」『口語篇』P.239

は、この間の事情を述べたものである。時枝の完結性は、表現がそこで切れる、ということである。これについても、線条的な見方の持っている限界を指摘することができる。最終的に完結性によって文が切れるにしても、文形成・文成立へと力動的に作用する文の構造が、切れる辞のみによって完結するわけではない。逆に、当の表現が文として成立していることの結果として、文末の辞が切れもしているのである。こういった線条的な見方による弱点も、これまた基本的に、文を表現行為的に説明記述することに基因しているものと思われる。

文は、時枝にあっても、「述語格の文」と「独立格の文」（『日本文法文語篇』P.289）に分かれる。独立格の文が文であるのも、感動、欲求、願望等を表わす辞によって統括され、完結していることによる。

時枝文論は、既に述べたような諸々の問題を有しながらも、それが、文総体における言語主体に密接に関わる要素の存在を、極めて明確に指摘したという功績には、極めて大きいものがあると言わなければならない。説明・記述の仕方に問題があるにしても、言語主体に関与する要素が、文の構造総体（意味構造をも含めて）において、重要な役割を果たしていることは否定のできないところであろう。

〔注〕 山田文法における「句」「統覚」「陳述」などの概念については、拙稿「山田文法における文認定」『日本語・日本文化』No.6で詳しく述べてある。